

# <り・れ・ら>の曼陀羅： 多彩なアメリカ俘囚物語

A Mandala Chart of <Ri•Re•Ra>: Versatile Captivity Narratives

横 田 和 憲

Kazunori YOKOTA

## 序

同化 (Assimilation) という言葉そのものは、民主主義 (Democracy) こそが民族主義 (Tribalism) に代わる唯一の有効な手立であるだろう21世紀においては、もはや19世紀的な概念でしかなく、一種の歴史的なアナクロニズムだと言わざるを得なくなっているのかも知れない。すべての民族主義は分離、暴力、偏狭などと、ほぼ同義語だが、それは私たちが今まさに直面しているキナ臭い世界情勢が如実に物語っている。ただ、アメリカが民主主義社会をエトスとするのであれば、視点を変えて考えてみれば、例えば現代のアメリカ先住民インディアンが独自の言語、文化、価値観などを保持しようとする動向を現代の民主主義社会アメリカが阻む理由は何も無いということになる。民主主義は同化を強要するのではなく参画 (Participation) を誘うはずのものだからだ。

そこで、同化の概念も含め、先住民についての考察を施してみたい。先住民の苦難が開始する1492年以後、幾多の闘いの歴史を経て、白人による先住民の制圧は1890年に表向きには完了する。先住民にとって白人の開拓は侵略であり、採りうる選択肢は2つ——白人へ

の同化、あるいは自らの絶滅。こうして、他者の概念は、視点の設定によって反転を繰り返すことになる。

本論では、アメリカの歴史の、そして文学の第一のアメリカンネスが、恐らくは先住民との係わりにあるのだろうという事実に関一度立ち返り、白人支配のプロセスを辿りながらも、被支配者である先住民の白人への同化という従来の視点ではなく、あえて、支配者である白人の先住民への同化の可能性について、アメリカ文学の最初のジャンルの一つである俘囚物語の観点から考察してみる。図式的には、俘囚 (同化の程度の深浅を意識して「捕囚」ではなく「俘囚」という言葉を使うことにする) となった白人を [婦<り>たい]・[婦<れ>ない]・[婦<ら>ない] の3つの範疇に大別してみるが、各々は緊密に絡み合っている。特に<ら>の観点から、白人の著者 Bruce A. Burton による *HAIL! NENE KARENNA, THE HYMN* (1978) という作品を手掛かりにし、白人の先住民への同化という問題について考えてみたい。イロコイ5国連合を題材にしたこの長編歴史小説が示唆している、受容と同化に関する根本的な限界は、主人公の白人が記憶喪失であるという

設定に内在しているのかも知れない。だが、先住民として再生した主人公が新たに開始する生身の実を彩る先住民の世界は、異質ではあれ魅力に溢れている。そして、最後に、受容と同化の本質的な問題についても触れておきたい。

### 1 帰くり>たい, 帰くれ>ない, 帰くら>ない

アメリカ小説に先行し、当時は聖書についてよく読まれたとされる物語のジャンルに「俘囚物語」がある。「インディアン・キャプティヴ（インディアン捕虜）」と呼ばれるのは、インディアンに捕らえられたヨーロッパ系白人のことであり、白人側に捕虜にされたインディアンのことは決して意味しない。「俘囚物語」とは、インディアンに捕らえられ、さまざまな艱難を嘗めた後で、ふたたび「文明社会」に復帰することを基本とする、俘囚体験記である。<sup>1)</sup>凄惨に繰り広げられる幾多の闘いに血塗られた歴史的な文脈<sup>2)</sup>のなかで、インディアンに捕えられた白人男女の俘囚体験記が、宗教的な強い意味を秘めて数多く書かれ、広く読まれ、悲劇、恐怖、好奇心などの理由で人気を博した。短命に終わった作品、時代を越えて読み継がれてきた作品を合わせると、17世紀後半以降1870年までには500以上の俘囚物語が出版されてきたと言われている。聖書への言及が極めて多いことについては、「最終的な解放も含め全ての苦難が神の恩寵に委ねられているのだ」（VanDerBeets 266）という見解を踏まえながらも、何やら他にも深い意味があるのではないかと推測される。

先に述べたとおり、図式的には、俘囚となった白人を「帰くり>たい」・「帰くれ>ない」・「帰くら>ない」と3つの範疇に大別してみるが、各々が緊密に絡み合い重なり合うため、

各々の範疇を明確に区分けすることは難しい。帰りたいのに、帰れないから、帰らないという流れになるが、それでは身も蓋も無いので、「帰くり>たい, には、受動的な生き埋めの憂愁を強く意識し」・「帰くれ>ない, には、能動的かつ攻撃的な反発の側面を全面に打ち出し」・「帰くら>ない, には、積極的な受容と同化を願望する」と考えてみたい。

まず、「帰くり>たい, から始める。拉致された訳だから帰りたいと願望するのが自然である。だが、取り巻く状況が極めて厳しいために、受動的に、静観あるいは生き埋めの憂愁を余儀無くされる、というパターンだ。この代表作品として、俘囚物語の嚆矢と言って差し支えない、Mary White Rowlandson (circa 1635-circa 1678) の *The Sovereignty & Goodness of God* を挙げておく（原題は実に長いものだが引証文献に記載の Norton 版の注を参照して戴きたい）。1682年にボストンとロンドンで出版され (*The Sovereignty & Goodness of God, Together with the Faithfulness of His Promises Displayed; Being a Narrative of the Captivity and Restauration of Mrs. Mary Rowlandson ...* (Boston, 1682); *A True History of the Captivity & Restoration of Mrs. Mary Rowlandson ...* (London, 1682)), 以後、30版を重ねる。1752年に採用された現在のグレゴリオ暦とは1年と10日の前倒しになるが、原テキストでは1675年2月10日（木曜日）から11週間と5日の俘囚体験についての Rowlandson による記述である。

記述そのものが孕む深い意味については、この物語がピューリタン社会の要請に従い、解放と出版の数年の間に何度も書き直されなければならなかった理由を踏まえて、八木敏雄氏の示唆に富む言説を採りたい。「インディアン虜囚体験記とは・・・神の『大きな物語』

に最終的に回収される仕組みの『小さな物語』であり、「インディアンに捕えられて苦難をなめるという体験をキリスト教の『大きな物語』に回収するところみである。・・・『大きな物語』とは・・・聖書の『約束の土地』の予言が、歴史上の新大陸への移住と定着と征服によって成就するという物語のことである」(八木(2) 27)。さらに、「・・・インディアンにしてみれば、自分たちのすることなすこともふくめて、この世におこるすべてのことが、無断で自分たちの生活圏に侵入してきた『選民』が発明した神の勝手な筋書きにしたがわされることになるのは、ずいぶん迷惑な話であったにちがいない。・・・『筋書き』とは、最初にニューイングランドに侵入したピューリタンたちが、自分たちの行動を『約束の土地』カナンに入るイスラエル人のそれになぞらえ、その侵略と先住民の排除を必然と化し、正当と化す筋書きのことである」(八木(3) 28)。

[帰くれ>ない] は、どうせ帰れないのであれば、反発、復讐、そして殺害してやる、という系譜である。一つだけ例を挙げておけば、Cotton Matherの代筆だろうとも推察されているハナ・ダスタンの体験記などがその代表である。ハナ・ダスタンの体験記を下敷にした、Nathaniel Hawthorneの“The Duston Family”(1836)にも描かれている女性である。12人の先住民のうち10人を殺害するが、その中には6人の子供が含まれていたと言われている。

本題の [帰くら>ない]、つまり、アメリカ先住民への白人の受容と同化という仮説に進みたい。帰れないから帰らない、というごく自然な流れもあるが、ここでは積極的に同化する白人という点に注目したい。<り>、<くれ>で見た先住民への極端な反感ではなく、<くら>の可能性は無いのだろうかという仮説

である。ポストコロニアリズムではないが、ヨーロッパの優越という単一の価値観が非ヨーロッパ性の排除を模索する限り、同化など不可能なことかも知れない。南部の黒人も含め、いわゆる「奪われた者たち」のことを考える時、支配する者たちが「他者」あるいは「邪魔者」を排除する方策として、歴史上さまざまなスケープ・ゴートを仕立て上げて来たことは明白である。しかし<ら>の可能性が皆無だというわけではない。Natty Bampoを始め、ジェネシー渓谷のホワイト・ウーマン(白人のインディアン女性)と呼ばれるMary Jemisonや、John Williamsの末娘Eunice。

本論では、舞台もクーパーの作品とほぼ同じ5大湖周辺を背景に描かれた、白人の著者Bruce A. Burtonの*HAIL! NENE KARENNA, THE HYMN* (1978)を取り上げてみる(八木氏の『「イロクォイ族への謝罪」へのアポロジア』という論考もあるが、現代のアメリカの白人が先住民インディアンに向ける眼差しの変化を見ることが出来るという観点から、拙訳『『ネネ・ハルナ!—平和への讃歌』、開文社出版、1999』を試みた<sup>3)</sup>)。白人支配が続くアメリカ社会がエトスとする民主主義が、実は、「同化か絶滅か」の選択肢を強要されたアメリカ先住民インディアンのイロクォイ5国連合(Iroquois族系のOnondaga, Mohawk, Oneida, Seneca, Cayugaの5部族で発足するが、後にTuscarora族が加わって6国連合となる。以下、各部族の別名や訳語については、注3の2つの地図をご参照されたい。この連合の合議制がアメリカ議会のモデルとなり、アメリカの国章である13本の矢をくわえた白頭鷲は、この連合の表象である6本の矢をくわえた鷲である<sup>4)</sup>)にその萌芽を見ると、先住民インディアンの視

点に立つ小説でもあることを踏まえて、『ネネ・ハルンナ』を手掛かりにしながら、白人のアメリカ先住民への同化の可能性という問題について考えてみたい。

## 2 ネイティブ・アメリカンの世界

〈自然との共生〉あるいは〈自然の叡智〉というテーマは深遠である。

... The Japanese, like other cultures, have tried to control nature as best they could. But there was little they could do about the weather, the earthquakes, volcanic eruptions, typhoons, floods, fires, and tidal waves that periodically and unpredictably visited their lands. The Japanese didn't particularly trust nature, but they learned from it. ... All things are impermanent. ... All things are imperfect. ... All things are incomplete. ... Wabi-sabi represents the exact opposite of the Western ideal of great beauty as something monumental, spectacular, and enduring. ... (Koren 52)

これは日本人を例にとった自然への対応の仕方であるが、自然に対するアメリカ先住民インディアンの考え方も、西欧文明のそれとは違う。後者は、基本的には、自然を征服することに基盤をおくものであり、自然を受け身のもの、死んだものだと考えてきた。予測される大地震など、自然の脅威を前にした人間の無力さは、如何ともし難い。詳細は省くが、アメリカ先住民インディアンについての読めば涙が止らない感動的な作品、また、アメリカ先住民の作家たちが創作した作品についての日本の研究者も含めた研究書も数多く出版されている。

素晴らしく魅力的なアメリカ先住民の世界ではあるが、先住民への白人の受容と同化の可能性を考えてみる時、やはり否定的な見解に陥らざるを得ない。白人の先住民への同化の可能性に関する根源的な限界は、『ネネ・ハルンナ』に登場する白人の主人公カムサ・サディグエンダが記憶喪失者であり、過去の自己抹殺を余儀無くされた記憶喪失者であるがゆえにこそ先住民の世界で再生を果たすことが出来るという設定に、明確に示唆されている。つまり、Lockeの哲学が説くTabula Rasaの白紙状態、精神の無垢な状態でなければ、白人の先住民への同化の可能性は極めて薄いのかも知れない。カムサがノルマン系フレンチであるという設定についても一考を要するが、アメリカの民族的な多彩性からすれば、問題は無い。

『ネネ・ハルンナ』について簡潔に記しておきたい。タイトルの原語であるモホーク語は「平和への讃歌」と訳しておいたが、Nenekarennaを文字どおり英訳すれば、NENE=THE, KARENNA=HYMNとなる。英語ではHAIL!と呼ばれる哀歌のことで、イロコイ5国連合の国歌でもある。同時に、呼び掛けの意味を携え、悲哀の叫びも意味する。前任者の死に伴って遂行される、イロコイ5氏族による〈平和の連邦館〉の後継者を任命するための正式な儀式で唱和される讃歌の名称でもある。冬、春、夏、秋の4章から成る物語の展開については以下の抄訳を参照して戴きたい。固有名詞の表記はカタカナで統一した。原語については、注の3や、拙訳書の末尾に記載しておいた〈固有地理名〉と〈用語解説〉を参照して戴きたい。

### 第一編 冬

1550年のある冬の日、ガナノ（セント＝ローレンス）川南方の湖岸にまで狩猟の旅に出て



いたイロコイ族系エイセラケ族の戦士たちが、記憶を喪失してさまよい歩いていた一人の白人の若者と遭遇した。白人のそばには、エイセラケ族の若者カムサの屍が横たわっていた。そこはイロコイ族系ガニエンゲ族の領内であり、カムサは敵に急襲されて殺されたのだ。

ガナノ川の中州にあるエイセラケ村の人々は、カムサを手厚く葬った後、白人への対応として、カムサを殺したガニエンゲ族の戦士と白人を闘わせることにした。カムサの許婚者イズメイの心配りもあって、苦闘の末に勝者となった白人は、再生したカムサとしてエイセラケ族の一員となり、イズメイの兄カシグノから、エイセラケ諸部族の状況や、更に豊かに繁栄すべきその将来にとって重要な、白人たちとの交易などについて話を聞いた。イズメイと契りを結んだカムサは、ある日、鹿に導かれて着いた湖の大波がエイセラケ族の人たちを飲み込んでしまう不吉な夢を見た。

夢から覚めると、村では、イロコイ族系オノンダケ族の若者が捕虜となっていた。縛り上げられた若者は、すでに息絶えた双子の片割れの屍が切り刻まれ食にふされるのを目の当たりにしながら、自らも残虐な拷問に命を奪われていった。その仕返しに攻撃を仕掛けてきたオノンダケ族の戦士たちとの間で激しい戦いが幾日もわたって繰り広げられた。休戦が成立し、戦いはひとまず幕を閉じるが、オノンダケ族との密通者の存在を心配するカシグノに、カムサは自分の見た悪夢を語った。カムサは、密通の臭いのする男たちの首謀者が画策する熊狩りに、同行することを承諾した。オノンダケ族との戦いに疲弊するエイセラケ族のために、自ら、その首謀者の正体を暴くつもりだったのだ。春も間近な、早朝、皆の心配を背に受けたカムサは旅立っていった。これは失われた幻の自己への探求の旅立ちでもあった。

## 第二編 春

オノンダケ族のカナタゴワ村で、壮年の平和の唱導者アヨンワタは、カムサという男が捕虜となったことを知らされた。武力による諸族制圧を目論む族長アトタホに娘以外の全ての血縁を殺害されも、アヨンワタはなお、オノンダケ族を中心としたガナノ川南域を支配するイロコイ族血縁の諸族（ティウノントワネケ、カヨクエ、オンネンヨテ、ガニエンゲ）の統一による、平和国家の樹立に激しい情熱を燃やしていた。火あぶりの刑に処せられようとするところをアヨンワタに救われたカムサは、エイセラケ村で食にふされた若者たちの姉であるアタウェイガワから、オノンダケ諸部族の抗争に明け暮れる疲弊した状況を知る。

カムサは、いつか必ずエイセラケへ帰還できると告げるアヨンワタが語る、善神ラニコリヨと悪神ラニコラクセンとの葛藤や、自然の摂理に基づく統一平和連邦国家の樹立への苦悶を耳にし、自分の生きるべき人生の目的が何であるかを自覚した。だが、悪神の化身と成り果てたアトタホが、アヨンワタの理想実現を阻止すべく立ちはだかっていた。

四年後、アヨンワタの唱導する連邦国家の結成のための最初の集会在、オノンダケ諸部族の間で開催された。出席を拒否したアトタホ一派の乱入で集会は実りなく幕を閉じ、その後には繰り広げられる諸族との凄惨な戦いの中にあっても、アヨンワタは次回の集会に向けて粘り強い努力を重ねた。一年後に再開された集会のさなかに、アヨンワタのただ一人だけ残存する最愛の娘までもが、アトタホの計略で殺されてしまう。深い悲しみに包まれたアヨンワタは、ただ善神の慈悲を祈るばかりであった。

カムサの滞在が九年目を迎えるころ、アヨンワタは三度目の集会を企てたが、集う者は

一人としていなかった。絶望し、精気を失い、オノンダケ領内から姿を消そうとするアヨンワタを見送るのは、腕に蛇を巻きつけ、せせら笑いを浮かべたアトタホただ一人だけだった。カムサは、アヨンワタが姿を消した今、アトタホを討つのは自分であると考えた。だが、契りを結んだアタウェイガグワの、この地での滞在の身の危険を憂える忠告に従い、一人エイセラケ村への苦難の道を急ぎ、カムサを待つ家族や村人との再会を果たした。

アヨンワタは、苦悶の中、まずガニエンゲ族とオンネンヨテ族との間に同盟を結ばせようという微かな希望を抱いて、新天地ガニエンゲの領地へと足を運んでいた。二度にわたる巨大な熊との格闘や荒れ狂う嵐など苦難の旅を経、理想実現の思いを込めて作った白い貝殻数珠を胸に掛け、照り付ける真夏の陽光を受けながら、ガニエンゲ族の村カグノワガに到着した。そこには、アヨンワタが常にその加護を信じていた善神が夢に現われて告げたとおり、一人の若者ダガナウィダが待ち受けていた。

### 第三編 夏

二十歳の青年ダガナウィダはアヨンワタと同じく平和の唱導者であり、自然の摂理に基づく統一平和国家の樹立を唱えたために、イロコイ族系の所属する部族から追放され、ここカグノワガ村に身を寄せていたのであった。こうしてアヨンワタ、ダガナウィダ、そして彼らの擁護者ハロンニアクタジェの三人は、ダガナウィダの構想に従い、五族から成る統一平和国家の結成に向けて周到な計画を練っていった。諸族の賛同をそれぞれ得るといふ難題に加え、予測される様々な障害の中でも最たるは、やはり、悪神の化身アトタホを説得することであった。

三人の意を受けたガニエンゲ族の族長テカ

リホケン、千五百もの民の前で、連邦国家創設の必要性を力説した。ガニエンゲ族の人々は賛辞の声を轟き渡らせた。ハロンニアクタジェは命を受け、オンネンヨテ族の長オダツェテのもとへ出掛けていき、暫く時間が欲しいという返答を持って帰還した。その報告に従って実行された翌夏の再訪により、アヨンワタとダガナウィダの面前で、オンネンヨテ族の人々の賛同が得られた。

アトタホとの交渉のため、アヨンワタたちはオノンダケ族の領地へと向かうが、そこでアヨンワタは娘の養母アタウェイガグワと再会し、カムサが連邦国家創設の必要性を説くためにエイセラケ村へ戻ったことを知った。アトタホには、ハロンニアクタジェを介して、ダガナウィダとオダツェテが会見した。だが、蛇を身にくねらせたアトタホは、連邦国家創設の申し出を事もなげに拒絶した。この事態を十分予測していたアヨンワタの今後の戦略は、今アトタホと壮絶な戦いを繰り広げているカヨクエ族を連邦国家創設に賛同させ、アトタホの属するオノンダケ族の民を長老たちの説得によって連邦国家創設に賛同させ、こうしてアトタホを説き伏せ、最後にティウノントワネケ族を連邦国家創設に賛同させて、統一平和国家の樹立を実現しようというものだった。

カヨクエ族との交渉は、ティオヘロ村での、族長アカヘニオンクによる民の説得によって成就され、オノンダケ族との交渉は、長老のロノンウラクトンやスカナワティによる民への説得によって成就された。いよいよアトタホとの再度の会見がオノンダケ族の人々の前で始まった。ダガナウィダと諸族の代表から、連邦国家の長となるようにとの要請を受けたアトタホは、一人籠った自分の部屋で悪神の力を授かろうとするが、逆に空高く宙を舞い、大地に倒れ込んでしまった。これを契

機に悪魔祓いを済ませ、長の患いを脱したアトタホは、ティウノントワネケ族をはじめ諸族の代表が見守るなか、平和連邦国家のかがり火をともした。讃歌ヘイルが唱和され、平和の象徴としての白い貝殻数珠が献納されるなか、連邦国家の構成上の手続きが完了し、ここに自然の摂理に基づく五族統一平和連邦国家が樹立された。

オノンダケ領内で開催されたアトタホの司る最初の会議は、すべてが、善神ラニコリヨの慈悲の下に、自然の摂理に基づいて実行されること、敵をも含めた周辺諸族へ和平の思想を拡大していくこと、そのためにまずエイセラケ族を説得し、同時に、連邦国家繁栄のために不可欠な、白人たちとの交易を促進することを決議した。

#### 第四編 秋

秋を迎えたエイセラケ村は収穫を祝う祭りの準備に忙しかった。家族との生活に人生の充足感を覚えていたカムサにも、平和連邦国家樹立の報は届いていたが、エイセラケ族には連邦国家の武力による侵略を危ぶむ人たちもまだ多くいた。この状況下、アヨンワタを筆頭にした熱い思いの命を受け、五族統一平和国家の使節団が、白い貝殻数珠を携えてエイセラケ族を訪問した。だが、連邦国家への参入の是非を巡り、エイセラケ族の繁栄の鍵である白人たちとの交易を盾にした強力な反対意見が表明されて、使節団の説得は失敗に終わった。

しかも帰路、敵モヒカン族の襲撃のため、生還したのはただの一人という惨状であり、さらに不運なことには、エイセラケ村に近いガニエンゲ族の領地で使節の帰還を待ち侘びていたアヨンワタは、敵の襲撃で命を落としてしまう。厳粛なる葬儀の後、アヨンワタの地位を引き継ぐカネラティヨが指名され、五

族統一平和国家の理念を推進しようとするが、周囲を敵に囲まれている連邦国家の窮状を打破するためには、やはり武力による制圧が必至であるとの意見は強力であり、その手始めとしてエイセラケ族を壊滅すべしとの結論に至った。余りにも脆い平和連邦国家の崩壊であった。

襲撃によってエイセラケ村は壊滅され、カムサは妻イズメイも亡くすが、何とか脱出を図る。そしてカムサは、失われた自己の幻を追い求めて過ごした日々の中で繰り返された、アヨンワタが推奨した五族統一平和国家の盛衰を振り返り、また、難を逃れて今は姿を消している息子アゴガシのことを思いながら、娘スケナドンナと二人、ガナノ川の流れてに身を任せてガニエンゲの領地へと運び去られていった。そこには、かつてオノンダケの領地で契りを結んだアタウェイガグワが待ち受けていた。この地での生活を始めたカムサに出自の記憶が戻ることは無かったが、数年が経ち、晩秋を迎えるころ、娘スケナドンナは、統一平和国家樹立の推進者となるべき期待を一身に背負った男の子を出産した。

未刊公のものではあるが、この作品の意義を十分に洞察していると思われる論考("Hail! by Bruce Burton: The Birth of American Democracy" by S.R.Lavin)を礎とし、民主主義や同化の問題を敷衍しながら、以下に訳出しておきたい。

『ヘイル!』は広い視野に立った叙事詩的歴史長編小説である。カムサ・サディグエンダ——記憶を喪失し、インディアンの同胞によって新しい記憶を付与された「白人」——を通して、私たちは歴史の皮肉な一つの逆転を提示される。もっと正確に言えば、長期にわたって私たちが歴史について真実だと考えてきたことが、実は根も葉もない絵空事とし

かなかったということであり、バートン氏は、アメリカの民主主義が実は白人が究極的に抹殺し、体制に組み入れ、そして今なお虐待し続けているインディアン諸部族の中で生まれたのだというこの皮肉について、控えめにではあるが、アヨンワタ——インディアン諸部族の連盟について沈思し、遂にそれを樹立した洞察力に満ちた戦士——を通して述べている。

アメリカ先住民の文化的領域についてのバートン氏の献身的な調査は、私たちの精神を鼓舞する。私たちは生理的な浸透性によって、この物語の登場人物たちの、言語から動機に至る深遠さと誠実さを把握し始める。

さらに大きな見地から眺めると、私たちは霊的でさえある一つの宗教的な真実を意識し始めるが、その真実は現実の人々——思考し、感情を抱き、行為し、なぜ自分が現在の在り方を選んだのかをよく弁えている人々——の生活から分離されたものではなく、彼らの生活と深く絡み合っている。またバートン氏は、無意味な殺戮、恐怖や嫉みから引き起こされる暴虐、人肉食の風習、拷問、そして憎悪すべき殺害という身の毛もよだつ事実について、その必要があれば、それらを描くことに躊躇はしない。『ヘイル！』は単なるロマンティックな探求ではなく、事実に基づいた、良心の呵責をともしないドラマである。この種のドラマは、そうでなければ歴史の中に埋もれたままになっていたかもしれない高貴な女性や男性の存在に強く触発された非凡な才能が、その必要を痛感し、集中力を伴った並外れた行為によってしばしば成し遂げるドラマなのだ。

イロコイ諸部族の連合体結成の動きは、特定の個人の出現と直接、結び合わされている。アヨンワタの個人的な試練は、アトタホの、諸部族の民のための平和の理想を受け入れることについての断固たる拒絶に、明確に対置

されている。同時に、権力掌握に対する彼ら二人の敵対と苦闘は、創造を事とする善神ラニコシリヨと、破壊を事とする悪神ラニコラクセンという双子の兄弟の神話に、人間味を帯びさせている。

登場人物たちはまた一次的に描かれてもいない。アヨンワタは個人的な悲劇と、喪失の悲哀を通して内的な強靭さを見いだしているし、アトタホは非情で残虐な性格を通して平和への啓示を受ける。主要登場人物たちのこれらの「改変」は、完全に人間的な状況のもとに顕現化されている。

もっとも重要なことは、私たちが目にしているのは人類の真実の歴史であり、さもなりそうなる出来事の領域外で擬人化される神話ではないことだ。『ヘイル！』こそ正に現代の叙事詩的長編小説であり、現実の世界に生きる現実の人々が抱く現代の理想を、見事に具現した小説なのである。

バートン氏の『ヘイル！』はホーマーの『オデュッセイア』と同じように、記憶を喪失した放浪者の彷徨を一国の精神風土に織りなし、アメリカ先住民の言語、習慣、文化に満ちあふれた牧歌的な生活を産み出す詩的な感情の喚起に、歴史的な正確さを織り込ませている。私たちは、深遠なる人間性と、その対極に位置する強烈な残忍性に圧倒される。この野蛮と高貴との合体は『ヘイル！』に芸術作品としての大成功を納めさせているが、それはバートン氏が、幻想やロマンスよりも真実やリアリズムにより高い価値を見いだしているからである。

バートン氏の物語の叙述は自己省察の一編の詩となっている。土地や、登場人物の啓示を受けた心情についての鮮やかな描写は、十六世紀を生き生きと蘇らせている。私たちは、人間の希望と野心や多くの冒険と危険が象徴された世界を通り抜けることになるが、これ



らの諸要因は、究極的には、アメリカの経験の範となったインディアン諸部族による連盟の形成の舞台となるものである。

私たち自身の愛国心が告発されているために、読者の良心は、たとえ打ちひしがれるとは言わないまでも、激しく揺さぶられるはずである。連盟の形成という夢の実現を祝福しないことなど、どうして私たちにできるのだろうか？

『ヘイル!』は偉大な思想とテーマを喚起するが、それはこの小説が、偉大なる犠牲のみならず偉大なる勝利を描いているからである。『ヘイル!』は高度なメタファーであり、今この世界に存在する私たちは一体何者なのか、またアメリカ先住民たちの英雄的な苦悩が、なぜ時を越えて人類全体の苦悩と深く係わるのかという根源的な問題を、提起し告発している。「生命は、輪廻し、常に何かを私たちにもたらす」のであり、民主主義と自治の根源は迫害と戦いに源を発しており、それは私たちが切望するこの上なく高貴な真実——私たちが心の奥底から作り出した宿命を生き抜く、つまり、正義を分け与えながら平和に生きるというガヤネラの思想——についても同じことが言えるのである。

この言説を踏まえて、次に、受容と同化の問題点について考えてみたい。

### 3 受容と同化の問題点

白人の先住民への同化の可能性についての考察に続け、現代のアメリカ社会における現代のアメリカ先住民インディアンが採るべき、生存の在り方について考えておきたい。居留地内での強固な独自の経済的な基盤が確立できない限り、現代のアメリカ先住民インディアンが、アメリカのエトスである民主主義社会から隔絶して存在することは、もちろん、

まず不可能である。彼らが採り得る策としては、アメリカという民主主義社会に参画し、民主主義社会というエトスを構築している文化的また言語的に多彩な背景を携えた人種・民族の諸々の政治的主張ともども、アメリカ先住民インディアンとしての一つの政治的な主張をすると同時に、この民主主義社会アメリカで豊かに受容されることになるはずの、先住民インディアンとしての独自の伝統や価値観を保持して行くことにならざるを得ないのではないのか。つまり、メルティング・ポットではなく、モザイクあるいはサラダボールとしての民主主義社会アメリカの中での存在意義ということになる。民主主義は同化を強要するのではなく参画を誘うはずのものだからである。<sup>5)</sup>

現代のアメリカ先住民インディアンが民主主義社会アメリカで豊かに受容されるためには、彼ら自らの強い意志と同時に、受容する側には何が必要なのかについて考える時、要は、次の事実を、特にアメリカの白人が意識できるかどうかにか懸かっている。「アメリカとは・・・もともとインディアンが稠密に住んでいた土地に、イギリス人が勝手な理屈をつけてやってきて、原住民を駆逐し、殺戮して居すわったことに端を発する国であり・・・キング・フィリップ戦争(1675-78)・・・というような殲滅戦をくりかえして・・・『すべての人間は平等につくられ・・・』と宣言することによっておのれの殺戮と略奪を正当化するという欺瞞[白人主流派のイデオロギー]のうえに成立した共和国なのだ」(八木(2)27)という言説、また、「内部」に「他者」を抱え込んだ[白人主流派]文化の無意識、[白人主流派]集団の思考法、[白人主流派]支配の様式や言説を踏まえて、ロレンス風に言えば、"... there is always ... a certain slightly bitter resistance in the

white man's heart"（アメリカ白人の心のなかにも、やはり少し苦々しい抵抗感がある）（Lawrence 61）という意識を確認できるか否かということである。アメリカ先住民インディアンの視点からしてみれば西洋人こそが「他者」であり「異邦人」ではなかったのか。

「他者の記憶を語ることの不可能性という普遍的な命題」（吉田 282）も在るが、ツヴェタン・トドロフの述べる「他者を『愛さない、認識しない、自己と同一視しない』という典型的なモノローグ（独白、ひとり芝居）としての文化の立場から、文化を他者との絶えざる対話のなかにもあるものとしてとらえる立場への漸進的な変化」（トドロフ 355-6）が望まれる。実現は極めて難しいことかも知れないが、アメリカ先住民インディアンを含めたそれぞれの民族が尊厳さ（Pride）と謙虚さ（Humiliation）を携えて共存の道を探れるかどうか、全てはこれに懸かっている。<sup>6)</sup> この理想を実現するための一つの神話としては、先住民と白人の精神的な一体化を計る Natty Bumppo（肌の色こそ違うが、摺野でわしらは同じ道を旅するよう定められているのだという主旨の Chingachgook への言葉は示唆的である）、Queequeg-Ishmael、そして Jim-Huck の系譜が思い起こされる。

### 結

アメリカの歴史の、そして文学の第一のアメリカンネスが、恐らくはインディアンとの係わりにあるのだろうという事実は今一度立ち返り、白人支配のプロセスを辿りながらも、アメリカ先住民の白人への同化という従来の視点ではなく、あえて、白人のアメリカ先住民への受容と同化の可能性について俘囚物語の観点から検証してみた。

図式的には、俘囚となった白人を「帰〈り〉〈たい〉（生き埋めの憂愁）」・「帰〈れ〉〈ない

（攻撃的な反発）」・「帰〈ら〉〈ない〉（受容と同化）」の3つの範疇に大別した上で、特に〈ら〉の観点から、白人支配が続くアメリカ社会がエトスとする民主主義が、実は、「同化か絶滅か」の選択肢を強要されたアメリカ先住民インディアンのイロコイ5国連合にその萌芽を見るという皮肉な事実と、先住民インディアンの視点に立つ小説であることを踏まえ、『ネネ・ハルンナ！——平和への讃歌』を手掛かりにして、白人のカムサ・サディグエンダのアメリカ先住民への同化という問題について考察してみた。アメリカ先住民インディアンが現代の民主主義社会アメリカで豊かに受容されるための条件についても簡潔に触れておいた。

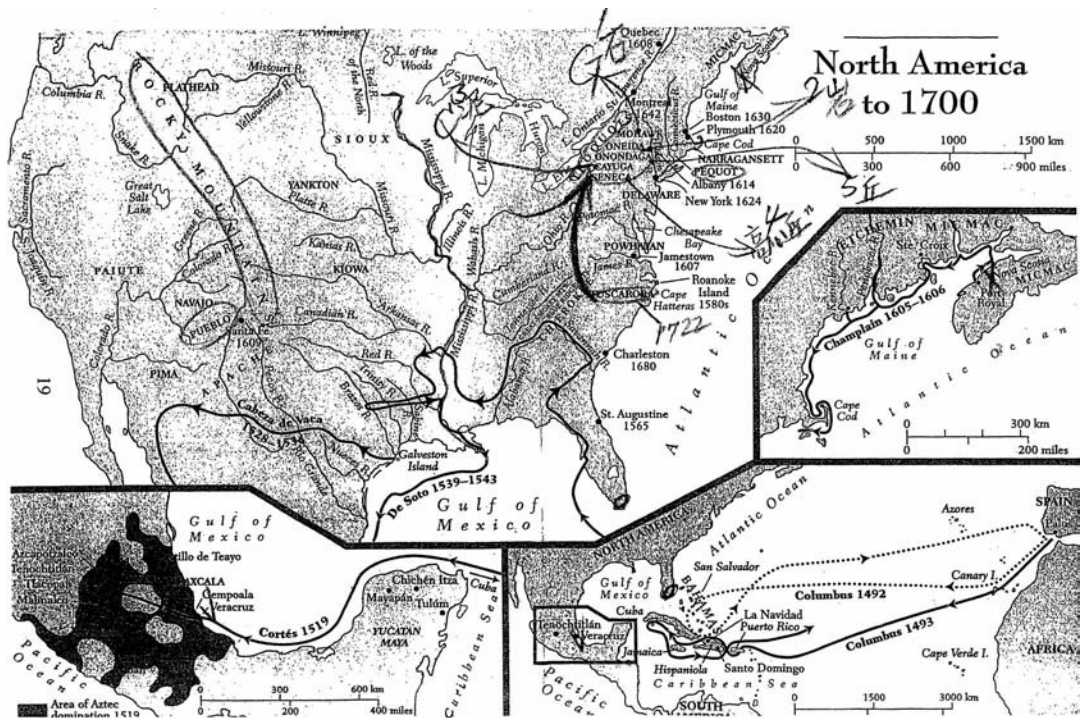
最後に、アメリカ先住民のイメージや、先住民と白人主流派との関係を意識しつつ、先住民への白人の同化の問題を踏まえて、黒人の観点から述べられた Toni Morrison の *Playing in the Dark* から示唆に富む言説を引用しておきたい。先住民を含め、人種差別に関する、普遍的な問題を提起した言葉である。"It is interesting, not surprising, that the arbiters of critical power in American literature seem to take pleasure in, indeed relish, their ignorance of African-American texts. What is surprising is that their refusal to read black texts — a refusal that makes no disturbance in their intellectual life — repeats itself when they reread the traditional, established works of literature worthy of their attention" (Morrison 13)。また、"There are ... powerful and persuasive attempts to analyze the origin and fabrication of racism itself, contesting the assumption that it is an inevitable, permanent, and eternal part of all social

landscapes. ... another, equally important one [study]: the impact of racism on those who perpetuate it. ... The scholarship that looks into the mind, imagination, and behavior of slaves is valuable. But equally valuable is a serious intellectual effort to see what racial ideology does to the mind, imagination, and behavior of masters" (Morrison 12). "Slavery" という言葉にこだわれば、人種間の関係に留まることなく、われわれは皆、何らかの意味で、奴隷であり俘囚であるのかも知れない。

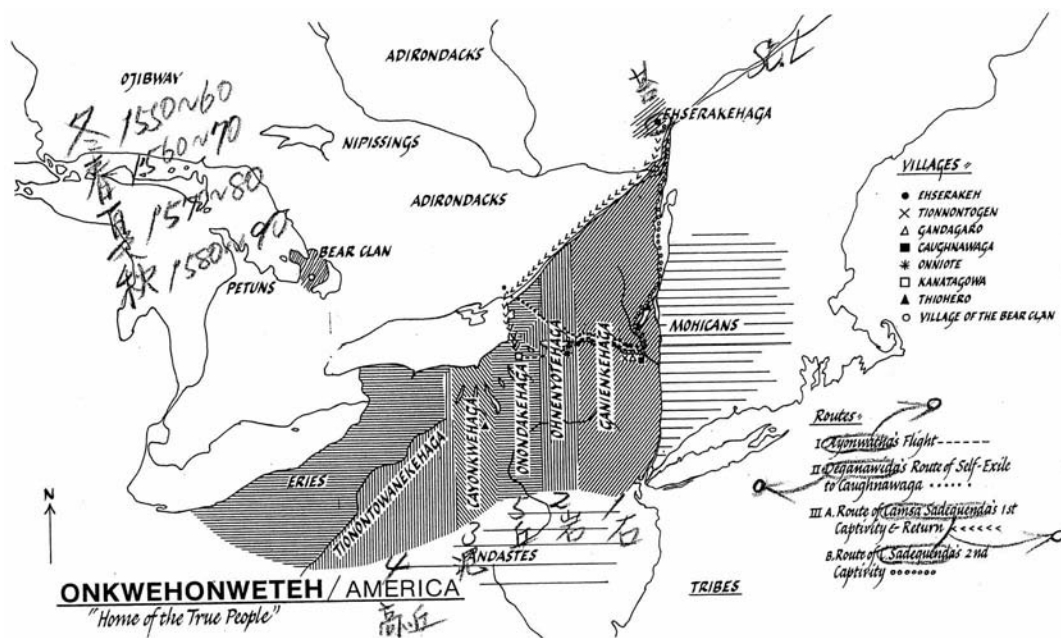
注

\* 本稿は、日本アメリカ文学会・九州支部・第51回大会（2005（平成17）年5月8日）における〈シンポジウム：ネイティブ・アメリカンとアメリカ文学〉の発表原稿に、加筆・訂正を加えたものである。

- 1) この文脈では俘囚物語は白人の視点からの物語になるが、逆に、先住民の視点に立つ俘囚物語はどのような物語になるのであろうか。また、例えば Mary Rowlandson の俘囚物語のテキストを先住民インディアンの視点に立って物語ると、一体どんな物語になるのだろうかという仮説に興味を湧いてくる。これについては機を改めて論じるための課題としたい。
- 2) 歴史的な文脈を簡単に振り返ってみると、まず人口的には、1600年のインディアンの推定人口7万2千人が、1674年には8千6百～1万7百人になっている。この間に〈1622年にジェームズタウンの虐殺〉、〈1637年にピーコット戦争（The Pequod War）という虐殺〉が勃発し、その後さらに〈1675～78年に掛けてのフィリップ王戦争（イギリス人に「フィリップ」とあだ名されたワンパノアグ（Wampanoag）族の王メタコム（Metacom, Metacomet）が、悲惨な最期を遂げ、その頭はプリマスで、手はボストンで晒されることになる〉、〈1689～97年 ウィリアム王戦争〉、〈1702～13年 アン女王戦争〉などが続く。
- 3) 本稿の一つの重要な核となる『ネネ・ハルン







ナ』については引証資料に記載しておいた拙稿「平和の偉大なる思想ガヤネラ：Bruce Burtonの *Hail! Nene Karemma, the Hymn* について」を参照して戴きたい。参考となる2つの地図を記載しておく。出典は *The Norton Anthology of American Literature* と *Hail! Nene Karemma, the Hymn : A Novel on the Founding of the Five Nations 1550-1590*。

4) さらに3枚の絵図を記載しておきたい。出典は *Northeast Indian Quarterly*。

- Benjamin Franklin and the Iroquois. 当時フランクリンはオルバニー案 (1751, 1754) の作成に没頭していた。



- George Washington and the Iroquois. "Peace & Friends 1784" の文字が刻まれている。



- US 1\$ の裏面の右側の絵図。1782年に採用された The Great Seal of the United States (アメリカ合衆国の国璽) の右側の絵図。イロコイ5 (後に6) 国連合の合議制が米議会のモデルとなり、アメリカの国章の13本の矢をくわえた鷲こそ、6本の矢をくわえた鷲という5 (後に6) 国連合の表象をまねたものであことを想起されたい。





5) 少し脱線するがメルヴィルのポリネシアン先住民との係わりで記しておきたい。Typeeの「後日談 (Sequel)」に登場する、通称 Jimmy と呼ばれる老漂泊者 (old rover) や、Omoo で言及される太鼓持ちとしての漂泊者の白人たち (roving whites) は、自らの積極的な意志で先住民と同化しているのかも知れない。また、生き埋めの憂愁、つまり〈どん詰まりの俘囚状況〉という点では、アメリカ先住民に係わる俘囚物語からは逸脱するが、Mardi の第71章に登場するジュアム島の帝 Donjalolo (The monarch of the Island of Juan), そして、その系譜に連なる様々な俘囚状況のことが思い起こされる。

さらに、"Of the seven [Herman Melville, Catherine Sedgwick, Lydia Maria Child, Nathaniel Hawthorne, Margaret Fuller, Henry David Thoreau, and Francis Parkman] only Melville offers anything like a radical critique of the civilization-or-extinction argument (and its rhetoric), and even he is ultimately incapable of dislodging or replacing the models he is resisting. He can offer his critique only by populating his texts with significantly silent presences who, by their silence, call attention to their exclusion from American public discourse" (Maddox 11-12) という引用をしておきたい。これは、メルヴィルがアメリカ先住民インディアンに強い関心を抱いていたことを示すための引用だが、同書で Maddox は、Bartleby の沈黙は、先住民インディアンが表象する〈他者の沈黙〉に通じると記している。

アメリカ先住民に係わる俘囚物語からは逸脱するが、Melville の *The Confidence-Man* の中間章に登場する、超極め付きのインディアン嫌い (the Indian-hater par excellence) である Colonel John Moredock のことを思い起こすべきである。アメリカ白人の一般的な意識の観点から推察すると、インディアンに復讐し、インディアンを処罰する時には、自らが残虐なインディアンにならざるを得ないというアメリカの白人ならではの複雑な宿命が浮き彫りになるし、恐らくはインディアンの方にこそ、より正当な復讐と処罰の権利があることを、白人が無意識に意識していることに係わる問題に繋がっ

ていくのかも知れない。

6) この点については、「インディアン俘囚体験記とは・・・神の『大きい物語』に最終的に回収される仕組みの『小さな物語』であった。・・・17世紀中葉から18世紀初頭にかけてのほとんどすべての俘囚体験記は、回心体験記と通底する宗教的体験記であったと同時に——むろん無意識だろうし、だからこそなお厄介なのだが——無断闖入者である自分たちの根源的暴力を[,] 闖入される側に転化するための言説、物語であった。・・・この種の言語行為から『隠蔽されている』のは『先住民の生活域に突如侵入を開始したヨーロッパの暴力』にほかならず、また『この隠蔽のためにこそ、物語が作られる必要があった』(八木 (3) 29), という言説が有用であろう。

#### 引証文献

- Burton, Bruce A. *Hail! Nene Karemma, the Hymn: A Novel on the Founding of the Five Nations 1550-1590*. Rochester, New York: Security & Dupont Press, 1978.
- Koren, Leonard. "Exquisite decay." *Utne* (September-October, 2001): 52-53.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. 1923. Viking, 1961.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature & the Politics of Indian Affairs*. New York: Oxford UP, 1991.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage Books, 1993.
- Nina Baym, et al. eds. *The Norton Anthology of American Literature*, 6th edition, 5 vols. New York: W. W. Norton, 2003.
- Northeast Indian Quarterly* (Autumn, 1986): 4.
- Rowlandson, Mary White. "A Narrative of the Captivity and Restoration of Mrs. Mary Rowlandson." *The Norton Anthology of American Literature*, 2nd ed., vol. 1 (New York: W. W. Norton, 1985): 138-176.
- Todorov, Tzvetan. *The Conquest of America: The Question of the Other* [translated from the French by Richard Howard] (トドロフ, ツヴェタン. 『他者の記号学—アメリカ大陸の

- 征服』（及川・大谷・菊池訳）．法政大学出版局，1986〔叢書・ユニベルシタス199〕．New York: Harper & Row, 1984
- VanDerBeets, Richard. "Mary Rowlandson." *Dictionary of Literary Biography*, vol. 24 (American Colonial Writers, 1606-1734), ed. Emory Elliott (Detroit, Michigan: Gale Research, 1984): 266-267.
- 八木敏雄. 「インディアンをアリアドネーの糸にして」. 『英語青年』(1995年10月): 5-7.
- ..... . 「Indian Captivity Narrative ことはじめ (1) : ポカホンタス神話 — アメリカの『ものかたり』」. 『英語青年』(1996年1月): 28-30.
- ..... . 「Indian Captivity Narrative ことはじめ (2) : インディアン捕囚体験記 — ニューイングランドのばあい」. 『英語青年』(1996年2月): 26-28.
- ..... . 「Indian Captivity Narrative ことはじめ (3) : あがなわれし／あがなわれざりし捕らわれびと」. 『英語青年』(1996年3月): 28-30.
- ..... . 「『イロクォイ族への謝罪』へのアポロジヤ」. 『英語青年』(2001年6月): 17-19.
- 横田和憲. 「平和の偉大なる思想ガヤネラ: Bruce Burton の *Hail! Nene Karemma, the Hymn* について」. 『東海英米文学』5号(1995年3月): 197-214.
- 吉田迪子(編). 『他者・眼差し・語り — アメリカ文学再読』．南雲堂フェニックス, 2005.